

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

地域民族誌の方法論と人類学的空間構想力の可能性の探求

2012年度第2回研究会（通算第2回目）

日時：2012年6月16日（土）13:00-19:00

場所：本郷サテライト7階

<全体要旨>

研究会は以下の発表題目と順番で行われた。それぞれの地域での研究史の概略と自らの研究課題が位置づけられるというのが全体に共通する構成だった。本研究会で想定している地域民族誌とは、人類学的問いかけが異文化の地域理解像と何らかの形で関わるものである。その意味で近年の科学技術の人類学などとは異なるものである。そうした地域民族誌に関わる人類学者が、問いとなる地域を前提として、フィールドで何を課題として見いだしてきたのか、そこからどのような理論を展望しようとしてきたのか、シベリア・オセアニア・アフリカ・中東を事例について議論が行われた。そこで明らかになったのは、通常教科書などでグランドセオリーの合間に紹介されるような既存の理論の出現の背景が地域民族誌的研究史のなかでより明確に位置づけられるということである。また当該地域研究に関わる他のディシプリンとの関係のなかでの人類学の位置が重要な論点となることがわかった。さらにその地域概念そのものが歴史言語学的な枠組み・地政学などで規定されていると共に、例えば、中東人類学のように、その枠組みが研究の進展によって常に揺らぎうるものであることもわかった。

高倉浩樹（AA研共同研究員，東北大学）

「人類学とロシア研究のなかでシベリア民族誌がめざすことについての覚え書き」

棚橋訓（AA研共同研究員，お茶の水女子大学）

「オセアニア島嶼を対象とした地域研究の現在」

椎野若菜（AA研所員）

「日本のアフリカ研究の展開」

飯塚正人（AA研所員）

「大塚和夫と中東・イスラームというフィールド」

赤堀雅幸（AA研共同研究員，上智大学）

「沙漠から大都会まで，部族からスーフィズムへ—中東人類学の展開のなかで」（仮題）

「人類学とロシア研究のなかでシベリア民族誌がめざすことについての覚え書き」

高倉浩樹（東北大学）

ロシア＝旧ソ連研究という地域研究を前提にして人類学のシベリア研究がどのような位置づけを取るべきか、日本・西欧・ロシアの研究史をそれぞれ紐解きながら考察した。その結果、日本のシベリア民族誌から切り開ける地域研究は、人類文化史や地域間比較を視野にいたした知見を開拓する事であり、それと既存のロシア研究との接合面を考えていく事だという結論にいたった。

「オセアニア島嶼を対象とした地域研究の現在」

棚橋 訓（お茶大）

オセアニア島嶼を対象とする地域研究は、まず、孤立と進化の概念で当該地域を捕捉し、ついで、比較の方法において進めることをひとつの定番としてきた。いまひとつの定番は、World History や global event の余波を一方向的に被る「受け身」のあり方を前面化するシナリオである。一方、1980年代以降、locational event からの再考を試みて「歴史のない地域」からの脱却を図る、「孤立した島世界」から「海で繋がれた世界」へ地域概念をシフトすることで新たな regionalism の醸成を図る等々、オセアニア地域研究のシナリオの複数化／分極化／多元化が進行し、Pacific Native scholars の存在感が増している。

「日本におけるアフリカ研究の展開：これからのアフリカ民族誌/民族誌的研究にむけて」

椎野若菜 AA 研

戦後 1950 年後半から、日本のアフリカ学は京都大学を中心に発展してきた。さまざまな分野の人がともに調査をし、独立後のエネルギッシュな「アフリカ」に関するあらゆることに関心をもち互いに影響しあい発展してきた。だが半世紀たち、近年の学問の細分化はアフリカという地域で調査する人間を変え、土地に魅せられその特性にこだわる研究者が少なくなった。アフリカ（サハラ以南）という地域の学問、民族誌的研究も、いままた転換期をむかえている。

「大塚和夫と中東・イスラームというフィールド」

飯塚正人（AA 研所員）

人類学は地域研究との関わりのなかでどのように存在してきたのか？また、それぞれの

地域研究分野をいかに刷新できるのか？

この問題をわが国の中東／イスラーム地域研究の文脈に即して考えるとき、大いに参考になるのは、当該分野に大きな足跡を残した大塚和夫の地域研究論である。大塚が2005年に行った講演「中東・イスラームというフィールド——さまざまなアプローチの布置状況」では、地域研究は「一定「地域」における諸ディシプリンの「統合」とされ、「複数の人間によるテーマ別のプログラム」などを通して実現されるものとおそらくは考えられていた。このとき大塚は、文献重視の歴史学やイスラーム思想研究、また定量分析重視の経済学・社会学と対比する形で、「テキストよりも人間、すなわちムスリムを対象とする志向性」を持ち、定性分析を重視する人類学・民族誌学の役割を論じているが、イスラーム地域研究はもとより、中東地域研究の主たる研究対象もムスリムに他ならず、「匿名的な一般ムスリム」が「常に一枚岩的で受動的」でもない以上、この分野の地域研究に人類学が欠かせないディシプリンとなっているのは当然と言える。

見捨てられ、再発見され、ずらされたフィールドとしての中東

The Middle East: A Research Field Once Abandoned, Then Rediscovered and Shifted

赤堀雅幸（上智大学）

（狭義の）「オリент」は黎明期以前の人類学にとって、主要なフィールドの一つであったが、ヨーロッパ人の視野が拡大し、より未開の地が志向された19世紀後半、さらに小共同体総体の理解が志向された20世紀前半の人類学では顧みられなくなっていった。1970年代以降、人類学における対象フィールド自体の変化に伴って、「オリент」は「中東」へと組み替えられ、フィールドとして再発見されて実験的民族誌が描かれる主要な舞台の一つとなるとともに、越境的に知性を育んだ人類学者たちを生み出した。さらに大塚和夫やアイケルマンに代表されるように、「イスラーム」のなかで実際の調査地を考察する人類学へのシフトが起こり、「中東」という概念自体は空洞化が進行している。